
うたかたの日々.....序章

N a t s u k i

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うたかたの日々……序章

【Nコード】

N1906V

【作者名】

N a t s u k i

【あらすじ】

透き通るような肌に飲み込まれるように抱かれた。
張りつめた産毛の彼方に吐息が漏れた。
塗りたくったカンバスのように翻弄され、混沌の間際に射精する。
痺れた脳髓を引き摺り、ベッド・ルームのドアを閉めた。

序章

透き通るような肌に飲み込まれるように抱かれた。

張りつめた産毛の彼方に吐息が漏れた。

塗りたくったカンバスのように翻弄され、混沌の間際に射精する。

痺れた脳髓を引き摺り、ベッド・ルームのドアを閉めた。

汗まみれの火照った身体を生ぬるい飛沫に浸す。

バス・ルームのドアが開いた。

水滴で曇ったミラーに貴女の影が宿った。

「何度往つたら満足するの？」

「欲望には際限なんかないの」

滴る雫の中で交わる。吐息の渦の深淵に、底なしの穴に何処までも落下する。

生き続けることは惰性、怠惰だと貴女は言った。

「長生きできないですね、それじゃあ……」

「そんな気なんて毛頭ないし」

「早死にしたいんですか、太宰や芥川のように……」

「別にそんな文豪に例えられてもね。どっちかっていうと中尊寺的かな、人の命なんてほんと儚いものだし……」

桜は散るから美しい。花びらは散り際を知っている。一瞬の快樂に生への執着は貴女にはない。

皺くちやのシーツの海に翻弄される小船のような僕がいた。

背中に安らかな貴女の寝息を感じながら、サイド・テーブルのワイングラスにフォーカスする。

薄くルージュの残るグラスの淵が瞳に焼きつく。確かに美しくそれは歪んで見えた。

「多分、私が殺したんだと思う……」

その言葉に僕は一瞬息を飲んだ。

「なんだか聞き違ったみたいだ、なんて言いました？」

「聞き違いじゃないわ。死んでって念じてたらほんとに死んでしまっただから」

「つ、つまり旦那さんをですか……」

「そう、毎日、毎日ね。昭夫はどうしようもないやつだったし、終いには前に付き合ってた女とよりを戻すし、仕事は辞めちゃうし、私のお金当てにして、仕事もしないでブラブラ、スロットばかりやってたしね」

淡々と話す貴女はいつもの貴女で、僕はそんな貴女の、パンプスをブラブラさせた足下ばかり見ていた。

「ダメ男に尽くす更に輪をかけたダメ女なんて私の趣味じゃないもの、だから毎日、毎日念じてたの死んでって……私のために死んでって……」

「で、死んじゃったんですね……」

昼下がりのスタバの店内。喧騒の中のいつもの日常、いつものチャイティー・ラテを飲む貴女。僕もいつものカフェ・モカ……今日のはなんだか特に甘く感じる。

「そう、あっけなかったわ。パチスロで十万だか儲けて、夕食食べようって携帯にTEL来て、でも、彼いつまでたっても予約していたレストランに現われなくてね……」

スリープのついたカップを持ち上げ一口飲み彼女は話し続ける。

「……家に帰ったら、昭夫あきおの実家から留守電入ってて、警察にすぐ来いって、昭夫が車に撥ねられたからって……」

その声はどこか遠くの深淵から聞こえてくるような気がした。顔色一つ変えず彼女はゆっくりと話し続ける。

「警察に行く途中、ほんとに思ってたの、死んでたらいいなって…生きてたらどうしようって、もう昭夫との生活にはうんざりしてたから、私の実家にまでお金の無心にゆくよ、ほんとに最低なやつだったわ」

「で、死んじゃったんだ……」

「なに夏樹^{なつき}、貴方そればかりよ今日。呆れたこんな私に……」
僕を見る貴女の顔は笑っているように見えた。

貴女の小振りでつんと上を向いた形の整った乳房が好きです。まるで完璧なハートのような形をしたお尻が好きです。

細い二の腕や、脊髄がうっすらと現われた背中の絶妙なカーブが好きです。

それらを丹念になぞってゆくと堪えきれずに貴女が吐く吐息はもっと好きです。

上唇がほんの少し捲れた誘うような唇にキスすると、すかさず舌や唾液が侵入して、僕は更に貴女を好きになります。

白状します。僕は貴女に夢中です。

「中学の時ね、大嫌いな古文の先生がいたの」

「最低な旦那の話はもう終わり？」

「いいのよ、死んだやつのことなんか、もうどうでもいいの」

「まさか、その先生も……？」

「そう、ヒステリックでやな婆あだったの。うち女子高だったから、なんか目立ってたのかな私。身長あったし、あの頃髪もショートで男みたいだったし、クラスでは人気があったしね。教師には特に反抗的でもなかったけれど、授業に興味がないならいいけどその婆あが自分を無視するなって職員室に呼ばれて小一時間説教されて……それ以来大嫌いになった、で、念じたの」

「死んだのその教師？」

「一週間かそこいらで脳卒中かなんかでメトロの階段から転げ落ち

てね……」

「まだ、他にもある口ぶりだね」

僕は冗談めかして言ってみた。

「うん、あるよ。だからね、怖かったりするのよ、念じるのがね。神様どうか私が誰かを嫌いになりませんようにっていつも小さな頃から思ってたりするの」

彼女の口から零れるその現実離れた話を僕はなぜか信じた。彼女の現実離れた美しさがそうさせたのかも知れない。

平穏な日常の真っ只中で彼女は平然とそんな話をしていた。

そして、僕はその真っ只中でちっぽけな疑念すら抱かず信じたのだ。「だからね、私は殺人者なのよ。現実には下してないけれどね、何度も重なると偶然にも真実の重みがつくわ、分かるでしょ夏樹……」

「うーん、そう言われてもね。どう分かったらいいのか、今のところ分からないってのが正直なところ」

「警告してるのよ、夏樹が好きだから……私と付き合うのはそんなリスクが伴うってこと……」

正面から貴女に見つめられるとなんだか心臓が高鳴り頬が赤らんだ。女子高の時の貴女に会ってみたかったな、きつともっと素敵に思えただろう。

「真面目に言ってるの？」

「……どう思う。嫌いになったら夏樹を殺しちゃうかも……」

項の産毛に舌を這わすと、身体がいつものように小刻みに反応する。太ももの内側に向かって指を動かすとその小刻みな反応が更に鋭敏な快楽を呼び覚ます。

湿った肌が小刻みな微動に揺れ、あらゆる豊かな曲線が絶頂に向かうハーモニ―を奏でる。

あの最も暖かで密やかな場所は溢れ出る欲望に満たされてゆく。

指先が、舌が、あらゆる鼓動が、性器さえも、その弛まない絶頂に向かつて上りつめようと貪欲に相手を弄る。

「はああ、夏樹、焦らさないで……いつまで、そうしてるつもり……」

僕だって君の指先に焦らされる続けてるんだもの…… あいこでしょ？ 違う？

大学にもマンションにももう一月も帰っていない。

僕は貴女、いや、冬子ふゆこさんのマンションに入り浸りだ。

で、一步も出ず何をしてるかと言えば……セックス、食べて、貪欲、飲んで、獣、食べて、浅い眠り、一人ぼっち、交尾、ベッドルームの等身大の鏡、正常位、後背位、ベッドの背もたれに拘束された裸の僕の姿、騎乗位、哀れな屍、動かすたびにジャラジャラ言うピンクの手錠、食べて、飲んで、手を伸ばすと齧った後がついたコンビニのサンドイッチ……。

まどろみの中でドアが開く音が微かに聞こえた。

「冬子さん！ 早く！ 漏れちゃうよ、早く！」

「見てあげるよ、ここでやっちゃえばいいじゃない」

眼の前に跪き薄笑いを浮かべながら冬子さんが言った。

「嫌だ！ それだけは譲れない……お願いだからこれ外して！ ほんとに漏れちゃうよー」

「ふーん、最後の抵抗ってやつね。自分から拘束してくれて頼んどいて、まだ、男を装うなんて往生際の悪いやつ……」

「お願い、冬子さん。なんでもするから、手錠外して、お願い！」

「ダメ！ 絶対ダメ！ そんなことしたら夏樹が快感だけでしょ、何？ パンツが濡れるのがやなの、じゃあ、脱がしたげる」

氷のような薄笑いが冬子さんの顔面に張り付く。その横顔の美しさに僕は、尿意すら一瞬忘れる。ぞくぞくするような永遠が流れる……

……このまま時が止まればいいんだ……。

「何、暴れてるの！ いいから、ほらこんなに勃起してるくせに、早くしちやいなさいよ！」

「お願い、お願いだから、ト、トイレに行かせて……」

激しい抵抗に諦めたように冬子さんはベッドルームを出てゆく。手錠を掛けられた手首に薄らと血が滲んだ。

「ちょっとでも動いたら切れちゃうよ。動かない方がいいと思う」
右手に握られた鋭利なハサミが僕のパンツをゆっくりと切り裂いてゆく。

「そうよ、最初から素直にね、そうしてればいいのよ」
勃起した僕のペニスが露になる。尿意は頂点に達する。

黒いレースのキャミソール姿の冬子さんが勝ち誇ったように僕の前に仁王立ちになる。

茶褐色のフローリングに尿が流れてゆく……止めどなく、それは、この広い床を覆ってしまうほどの勢いで流れてゆく。僕の最後に残った米粒ほどのプライドも何もかもが根こそぎ流れていった。

もう何も残ってやしない。パンドラの箱の底に残ったのは、冬子さん、貴女への愛だけだ。

「泣いてるの夏樹。そんなに嫌だった？ 見られるのが……お腹の上に自分の欲望ぶちまけるくせに、オシッコするの见られるのは嫌なんだ、随分身勝手なやつだね」

僕は泣き続けた。冬子さんの胸に顔を埋めて、愛していると千回も叫びながら泣き続けた。

終いには何故こんなに泣いているか分からなくなるほど泣き続けた。

その日僕らは何度も何度も獣のように交わった。汗や唾液や吐息が交じり合ってどっちのものだか分からなくなるほど交わった。そうすることでしか得られないものがあるような気がした。言葉は空しく通り過ぎる風の中で悶え消えていくけれど、この重ねた一瞬

だけが何がしかの真実を含んでいるような気がした。いや、二人ともそう錯覚したかっただけだったのかも知れない。

この街を二分する大河の河川敷に作られた自動車学校で僕は冬子さんと出会った。

仮免の試験を何度も落ちる貴女の沈んだ後姿に声を掛けたのは僕のほうだった。

ヴィトンの大きなシヨルダーを持った長身のキャリア・ウーマン然とした貴女は、ケバいファッションの若い女の子が多いこの学校では最初から目立っていた。

入所が一緒だったから、自然に挨拶をするようになり、何度も顔を合わせると学校の待合室などで二言、三言話す仲になっていた。

「そんなに落ち込まないで、次は受かりますから」

「私って運転に向いてないんだわ、きつと、そう。だってこの歳まで車なんてナビのシートが指定席だったんだもの……なんで、今ごろ免許なんてねえ」

「今度は受かりますよ、きつと」

「気休めね、それ……運転の才能ないのかなあ、悩むなあ」

肩をすくめて自重気味に話す貴女が年上には思えないほど可愛く見えた。

「人生で初めてよ、試験というものに落ちるのはね……それも、見通しの立たない迷路にはまりこんだみたいだもの、受かる気がしないってのも初めて……」

「そんなに落ち込まないで、たかが運転免許の試験に落ちただけじゃないですか、そんなことで貴女の人生が終わるわけでもないし……」

……

「落ち続けてるのよ。一緒に入った渡辺君、貴方もう本験受かったんでしょ」

「はい、おかげ様で今日受かって、後は学科受けて、ここともさよならですね」

「はあー、落ち込んだじゃうなあ私。自分がこんなに鈍いなんて思ってもみなかったわ」

「まあ、そんなに溜息なんかつかないで……僕が奢ります、なんか食べましょ、ほら、気分変えて……」

「はあー、大学生の君に奢ってもらうの、二十八の私があ、尚更落ち込んだじゃうわよ、はい、私が奢るから付き合ってね」

学校の近くの貴女が良く行くという力キがメインの旬鮮料理の店で、僕らは生ガキと焼きガキ、酒蒸し、フライ等々、旬の力キを堪能し、彼女が吟味した高そうな白ワインを何本か開け、貴方は力キの蒔蓄と、今までの人生がいかに順風満帆だったかを仔細に僕に語った。

「この力キはねえ、産地の漁師さんから直送なのよ」と言いながら、レモンをたっぷりかけ、生ガキを頼張る貴方の口元がやけに色づかったのを僕は、今でも鮮明に覚えている。

「北海道、厚岸の力キは一年中食べられるし、十一月から一月はサロマの弧太郎ガキでしょ、で同じ時期に三陸の力キも食べられるし、秋田産の天然の岩力キは6月からね、で、たいして勉強もしてないのにWの政経現役よ、人生で初めての挫折がこれかなあ、やんなっちゃうなあ、全く……」

「ねえ、なんで、なんで私が三回も仮免落ちなきやいけないのよ、もう、なんでなの……一部上場企業をコネもなしで実力で受かって今の地位だって熾烈なエリート面した男たちを押しつけて、年収八百万に届こうかっていう私がよ、なんで、落っこちるわけ……」

脚を組んだ格好でカウンターに何度も拳を打ちつけ、彼女は本当に悔しそうだった。

僕はと言えば、スリットの入ったスカートから覗く彼女の脚と、宙に浮いた黒のパンプスが所在投げに揺れているのをただ馬鹿みたい

に眺めていた。

灰皿には彼女の怨念のように吸殻がたまり、僕たちは確かにここ
たま酔っていた。

彼女がグラスに残ったワインを一気に開け、僕をじっと見据えた。

「渡辺くん、貴方よく見るとイケテルってわけじゃないけれど、ま
あまあよねえ」

「ああ、それ、よく言われますねえ。イケテルってわけじゃないけ
れど、悪くもないって……」

僕だって酔っていたのだ、二十八の成熟したかなり落ち込んでいる
かなり手ごわい女性に対して、それくらいの軽口は叩ける。

タクシーは中々捕まらなかった。

彼女は完全に酔っ払い、千鳥足で僕の半歩先を歩いている。

とうとうパンプスを脱ぎ、両手にそれをぶら下げ調子外れの歌ま
で飛び出す始末だ。

「冬子さん、ほんとに大丈夫ですか……」

「おっ、名前で呼んだな……ははは、私たちもうソウル・ブラザー
だねえ、ははは……」

言いながら彼女は僕の腕に倒れかかった。

「渡辺くん、渡辺くん……私、今日はどうかしてる……そ、そ、早
朝から会議なんだよねえ、ち、ち、近くのホテル泊まるわ。そ、そ、
そこまで連れてって……」

僕は、彼女とヴィトンの小ぶりなバッグと重そうなヴィトンの書
類ケースを抱え、彼女がその時だけ毅然と差し出したカードで支払
いを済ませ、ホテルのフロントを抜け、十階だかのツインの部屋ま
で行き、そこで力尽き、彼女とともに一人には大きすぎる片方のベ
ッドに抱えた彼女もろとも倒れ込んだ。

天井がまるでプラネタリウムみたいにチカチカして見えた。

どのくらいそうしていただろう、僕の上にはつまり冬子さんがいた。
「じゃあ、冬子さん、あんまり落ち込まないでくださいねえ、僕はお役目終了ってことで帰りますから……」

立ち上がろうとした僕の腕を冬子さんの腕が遮った。

「帰るの……」

顔を覆った乱れた栗毛色の髪の下で、冬子さんの瞳が僕を見つめていた。

「人生で初めて挫折を味わった女を一人残して貴方は帰るわけね……」

分厚いカーテン越しに、大きなはめ殺しの窓ガラスの上にぽっかりと浮かんだ満月が妖しく光を放っていた。

窒息するほど密度の濃い月灯りだけが部屋の中を照らしていた。

「知ってる……月の光って一度死んでるのよ、太陽の光を浴びて輝いてるだけだもの、生命はその太陽の光を全身に浴びて死ぬ速度を速めてるのよ……だから人間は、月に反射した死んだ光を体中に浴びて、少しだけ生きるのを止めてね、月灯りの中でだけ、生命の呪縛から逃れることができるのよ……」

冬子さんが言いながら腕の力を強めた。

ベッドに倒れ込み視線が絡んだ。

「冬子さん、僕だって五体満足で健康な日本男児ですから……」

「渡辺くん、貴方ねえ……きつと、そこがイマイチイケテナイところなのかもね」

「ああ、それも良く言われま……」

彼女の人差し指が僕の言葉を遮った。

「饒舌な時間はもう終わったのよ」

長い、長いキス……舌が絡まり、唾液が小さな音を立てた。鼻腔を撫でるパーヒュームの香り、はちきれそうな僕の欲望を冬子さんの細い指が優しく導く。

一度目は呆気ない絶頂。二度目は冬子さんの吐息が容赦なく僕の脳裏を掠める。

三度目。すでに朝が近い……、乱れたシーツの隙間から薄目を開けた冬子さんの横顔を見つめた。露になった太ももや陰毛がぼやけた室内の中でひっそりと息づいていた。クシャクシャの髪を愛撫すると僕たちは一瞬の眠りに落ちた。

「そろそろ大学行かないと単位落とすわよ」

半裸のまま冬子さんの部屋で一月を過ごした。今では腕の手錠は僕の身体の一部のようにしつくりと馴染む。

「心配してくれるんですか……？」

セックスの合間に一緒に食べ、風呂に入り、髭をそってもらい、身体を丹念に洗いあい、排泄、そんな時だけ手錠を外してもらう。望んだ自堕落な生活も永遠には続かない。

「夏樹のことは分かっているつもりだけど……」

こういうことでしか貴女への愛を成就できない僕は最低です。それでも、貴女の傍にいたい。子犬のようにクンクン鼻を鳴らして貴女の傍で貴女の愛撫を待っている。

「飽きたんですか僕に……それとも、こんなうたかたみたいな生活してるくせに、外では相変わらず仕事のできる女を演じてる貴女の方が僕には信じられない」

「……じゃあ、どうすればいいの！ このままここに閉じこもってずーっとセックスに溺れて、お金もなくなって、食べるものもなくて、それでもセックスして……」

「僕がどんなに貴女を愛しているか……信じてくれないんだ。いつも感じるんだ！ 貴女は抱き合ってたってどこか違うところを見ているって……」

何も言わず冬子さんは僕の腕を取った。ミミズバレの腕を丹念に舌でなぞる。

「夏樹、ここ、こんなにミミズバレになってる……」

僕は黙って腕を差し出す。

冬子さんがその腕に手錠を嵌め、ベッドの頑丈な枠にもう一方を嵌める。

「……こんな毎日って夏樹が望んだのか私が望んでいるのか分からなくなってきたの。冷たく、孤独だった私の部屋に貴方がいて、帰りを待つてる。若くて、飢えてて、何度でも私が満たされるまで……もういいと言うまで私の中に居座り続ける。それも、私が帰ってこなければ、夏樹は干乾びて死んじゃうんだ、そんな状況を、楽しんでる私がいる……いいの夏樹？　このままで……」

僕は黙って頷く。貴女に何もしてやれないんです……だから、せめて、傍にいたい。

いつそ、僕を嫌いになって、死ねと念じてくれたら、本望なのかも知れない。そんな

ふうに考えたりもします。特に、貴女が仕事で遅くなるって携帯にメールが入ったりすると、暮れてゆくこのベッドルームでまどろみながら……この広すぎない空間が唯一の僕の居場所だと思えたりするんです。今日はどんな愛撫で僕を満たしてくれるんだろう。貴女が帰ってくるまで頭の中はそればかりなんです。

「いい加減にして！　何処までついてくるつもり！」

会社の帰り僕は待ち伏せして貴女の後ろを歩く。夕暮れ時の雑踏の中で大声で貴女は叱責する。

「一度寝たからって何様のつもりなの。男ってどうしてこうなんだろう、自分勝手にも程があるわ！」

僕を無視して貴女は歩き続ける。

「デートなのよ、何処までついてくるつもりなの！」

「だって、携帯にかけても出てくれないし、自動車学校にも来ないじゃないですか、会ってくれないんならこうするしか僕にはないし……」

「察したらどうなの！ あれは、お酒の上の出来事……会いたくもないし、顔も見たくない……携帯だって貴方の着信で埋め尽くされてるのよ、うざいって気付きなさい」

冬子さんは僕を無視したまま長身のスマートな男と会社近くの喫茶店で落ち合った。

僕は術もなくその喫茶店の窓から二人を盗み見た。笑いあい、弾む会話を覗き見ながら、その喫茶店の外壁に膝を抱えて、通り過ぎる群衆の足下を見続けた。

子一時間程して二人はすっかり暗くなった雑踏の中に消えようとする。

間隔を開け、ゆっくりと二人の跡をついていった。

駅前の高級ホテルの最上階のレストランでエレベーターは止まった。

受付のコンシェルジュの洗礼を受ける。舐めるように僕を見ながらこう言った。

「お客様、当レストラン喫茶室は八時まででございます。この時間帯はご予約のお客様しかご利用になれませんが、ご予約はありますか」

僕は諦めきれず、ロビーで待ち続けた。

十二時近く、そろそろロビーのボーイの訝しげな視線が気になりだした頃、二人がエレベーターに現われた。

冬子さんは確かに僕を見た。驚いたような表情が一瞬曇った。

二人は人影もまばらなロビーを抜けて、タクシー乗り場に向かった。僕も二人に合わせてゆっくり立ち上がる。

二言、三言言葉を交わし、男がタクシーに乗り込む。タクシー乗り場には冬子さんだけが残った。ゆっくりと近付いてくる。

「何やってるの貴方……全く駄駄っ子ね、何考えてるの？」

「貴女のことだけです」

「十も違うのよ、分かってる？」

「ただの数字ですよ、そんなもの……」

「こんなことして、私が貴方を受け入れると思って？」

「受け入れてくれるまで続けるつもりです」

「さっきも言ったでしょ、会いたくもないし、顔も見たくないって……」

「愛してるんです。それだけです……」

「安っぽい告白ね、そんなクリシエ聞き飽きたわ」

千回も愛してると言ったら、通じるんだろうか？ 千回も交わったら真実が見えるんだろうか？ 心を決めて両手で貴女の前に差し出したら信じてくれるんだろうか……人はいつたい人を何処まで愛せるんだろう……奈落の底を垣間見たらそこには世界の涯ての涯てがあつて冬子さんと僕の二人っきりの純粹があるんだとしたら、それは悪夢なのか、それとも真実なのか、それともやはりそれにも涯てがないのだろうか……。

ブラインドの隙間から朝の柔らかな光りが室内に漏れた。密着した冬子さんの息づかいを感じながら項に唇を寄せた。

「起きてるの……」

「いつもは朝からつきし弱いんです。でも、今日はなんだか特別な気がして……」

「ははあ、元氣いいね渡辺君……若いって、正直と同義語だね」

「夏樹でいいですよ。あんなにしたのに、もうしたいってさっきからずっと思ってます」

「今日朝一で大事な打ち合わせがあるからね、その、貴方の願望には答えられそうもないわね」

サイド・テーブルの目覚し時計を確認しながら冬子さんは言った。ベッドを出ようとする冬子さんの腕を掴み、強引に引き戻した。

「な、何する気……」

抵抗する冬子さんの両手を頭の上で羽交い絞めにし、彼女に馬乗りになる。

「入りたいんです……いま、直ぐに」

僕を睨みつけ、顔を背けた冬子さんの唇に強引にキスの雨を降らせた。

「止めて！ 止めなさい！」

露になった乳首に歯を中てると、必死な抵抗が息を潜めた。

切れ切れない溜め息は更に僕を増長させる。

身体をこじ開け僕はゆっくりと冬子さんの中に分身を埋める。

シャワーを浴び素早く身支度を整える冬子さんをベッドに寝転んだまま見ていた。

その間終始冬子さんは僕を睨みつけている。

タンスの引き出しを開け何かを僕に放り投げた。

「今度、こんな強引なことしたら許さないから……前の旦那の趣味よそれ」

「手錠ですか？ 趣味ですか……」

「いいから、仕事に遅れちゃう。それで、夏樹の欲望拘束なさい。

ルールは私が決める、自分でそれ嵌めるのよ。私が外すまでそうしているの、夏樹の意志でそれを嵌め、そうしてる限り、傍にいさせてあげる。それが嫌なら出てって、帰ってくる前にね」

僕は言われるままに手錠を嵌め、彼女の目線に併せてベッドの枠に一方を嵌めた。

「そう、それでいいわ。力づくでなんて許せない……傍にいたかったらお預けも憶えるのよ夏樹、子犬みたいだね、クンクン鼻を鳴らす子犬みたいだね」

ドアが乱暴に閉まった。

自分で自分を拘束する……それでしか冬子さんの傍にいられる術はなく、そんな誘惑が僕を虜にした。

「こうして冬子さんと僕の「うたかたの日々」が始った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1906v/>

うたかたの日々.....序章

2011年8月6日15時38分発行